

筑波大学の「今」を切りとる季刊広報誌

TSUKU COMM

TSUKUBA COMMUNICATIONS

【ツクコム】



vol.
36
2017 SUMMER



筑波大学
University of Tsukuba





04 「聴」守友浩 教授

08 「TSUKUBA OBOG」ACHI <阿知和真吾> 氏

10 「附属学校めぐり」筑波大学附属駒場中・高等学校 植村徹 教諭

12 「躍動 筑波大生」三笠薫さん／澤田悠太さん

14 「Homeland」アランナ・ファラディヤニさん

16 TOPICS | 23 世界のトピラ | 24 リレーメッセージ

・今号の写真撮影協力：国際統合睡眠医科学研究機構



INTERVIEW



材料の基本物性を探索する

着実な理解から導かれる 革新的エネルギー技術

数理物質系
守 友 浩
教授

Yutaka Moritomo

携帯電話やパソコンなどのモバイル機器は、もはや日常生活の必需品です。それらは、高性能で小型化された電池があるからこそ、製品として完成され、普及してきました。知らず識らずのうちに、私たちの暮らしの中で重要な役割を果たしている電池。しかしその性能が発現するメカニズムは、必ずしも十分に解明されているわけではありません。そこに使われる材料の性質を深く理解することにこだわり、その先の新しい技術を見据えます。

■不思議な構造の「プルシアンブルー」

プルシアンブルーはその名の通り、濃青色の顔料です。300年ほど前にドイツで発見され、以来、絵画や陶磁器の彩色に使われてきました。日本でも、伊藤若冲や葛飾北斎など江戸時代に活躍した画家たちが使い始め、その美しい青色が評判になったと言われています。

このプルシアンブルーが科学的に注目されるようになったのは、ここ数十年ほどのこと。特異な結晶構造が明らかになり、機能材料としての様々な可能性が示唆されたのです。それは、鉄イオンがシアノ基で立体的な格子状につながれた、ジャングルジムのような構造でした。さらに、鉄イオンの価数を変えたり、鉄を他の金属に置き換えるなど、組成を変化させた類似体になると、磁性材料や電子材料としての性質が現れます。

それらの新たに見出された可能性のひとつ

が、蓄電池の電極としての用途です。ジャングルジム構造の中の空間に、ナトリウムイオンやリチウムイオンを充填・放出することによって、電池として機能します。汎用的な電極材料ではありませんが、プルシアンブルーは構造がはっきりわかっていて、電池特性の発現メカニズムもシンプルですから、研究対象には最適です。より良い電池特性を得るために、材料としての基本的な性質(物性)をきちんと特定しようと、研究を進めています。

■電池を学術的に突き詰める

リチウムイオン二次電池(蓄電池)は、充電時間や電池容量、耐用年数などに優れ、モバイル機器から電気自動車まで幅広く普及しています。しかしながら、急速な産業化の一方で、充放電現象の基本的な理論や仕組みの解明は遅れています。性能向上や小型化・低コスト化のための開発競争が激化する中、結果的に

求められるスペックは得られていても、それは経験則よるところが大きいのです。

大学の研究者としてやるべきことは、材料の持つ物性を突き詰めて理解し、様々な性能が発現する理由を明らかにすることです。そうすれば、望む性能に到達するための道筋も、理論的な限界も、自ずと見えてきます。電池に対する要求レベルはこれからますます高まりますから、結局はこういったアプローチが不可欠になるはずで

す。プルシアンブルーを電池材料として研究する例は多くはありません。しかし実用化を目指すというよりも、電池を学術的に捉えるにはむしろわかりやすい材料として、電池特性とそのメカニズムを詳細に探るためのいろいろな実験を行うことが可能です。実際に、新しい知見が着実に蓄積されつつあります。



■ 電池を超える新技術へ

すでに大きな市場のある電池の研究は、産業界のニーズに沿った形で目標が定まっていきがちです。研究しやすいとも言えますが、オリジナリティを発揮するには物足りなさもあります。そこで、全く新しいエネルギー供給の概念の提案も試んでいます。それが「熱発電」という技術です。数年前から温めていたアイデアを実験に移し、実現可能であることを示して、つい最近、発表しました。

熱発電は、電池の正極と負極の温度差(熱エネルギー)を電気エネルギーに変換して起電力を得るというものです。蓄電池には充電が必

要ですが、熱発電では電極の間に温度差があるだけで発電が起こります。この温度差も、室温付近で数度の違い、つまり、工場の廃熱や太陽熱、さらには体温などでも十分。特別な環境や装置を用意しなくても電力が得られ、既存の電池技術を活用できるため、開発コストもそれほどかかりません。発電所の代わりとはいかないまでも、災害時や緊急用のポータブル発電機などにも使える画期的な技術です。

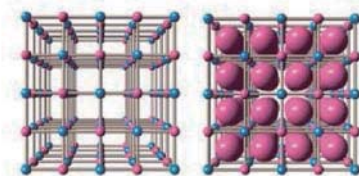
この研究でも、電極材料に用いたのはプルシアンブルー。熱発電材料としても有望であることだけでなく、より大きな熱起電力を得るための鍵となる物性や条件もわかってきました。越えるべきハードルはまだたくさんありますが、

基本的な概念さえしっかり構築することができれば、この研究を出発点として、実用化に向けた研究開発が一気に進むと期待されます。

■ クールに粘り強く

実はこの熱発電の研究は、発案してからしばらくの間、放置されていたテーマでした。当初、すぐに実験にとりかかり、考え方が間違っていないことは確かめました。しかしその時に得られたデータは、思ったほど良い数値ではありませんでした。どんなデータをどんな方法で調べるのが適切なのか、わからなかったのです。試行錯誤はしたものの、同じ実験でも、やるたびに違う結

コバルトプルシアンブルー類似体 $\text{Li}_x\text{Co}[\text{Fe}(\text{CN})_6]_y$ の結晶構造。左図は充電時、右図は放電時を示す。大きな赤丸、小さな青丸、小さな赤丸はそれぞれ、リチウムイオン、コバルトイオン、鉄イオンを示し、コバルトイオンと鉄イオンをシアノ基がつないでいる。





果が出るなど、研究を続けていく見通しが立ちませんでした。

考えてみればこれは当然のことです。前例のないテーマなので参考になる資料も存在しません。しかも、熱というのはそもそも精密に測定することが難しいものです。数年経って、綿密に設計した測定装置を使って、再び実験にチャレンジしたところ、最初のデータよりも格段に良い数値が安定して得られ、研究は前進しました。

このような挫折と再開の繰り返しは研究のスタイル。行き詰まった時はいつまでも悩まずに一旦中断する、その見極めはとてもクールです。でももちろん、諦めるわけではありません。他

のテーマに取り組みながら、気持ちと知識をリフレッシュし、再開のタイミングを待ちます。アイデアに自信があるからこそ、そうやって粘り強く探求し続けることができるのです。

■データにこだわり、論文にこだわる

物理学者として最も関心があるのは、材料の物性です。実用的かどうかではなく、新しい物性そのものが興味の対象ですから、あらゆる材料が研究テーマになり得ます。プルシアンブルーの特殊な構造と物性の面白さに惹かれて、電池の研究を始めましたが、電池特性も、あくまでも物性のひとつとして捉えています。

物性というのは数値で表すことができ、かつ再現性があること、すなわちデータの信頼性がなによりも重要です。研究室の学生に対しても、データを確定させることを、まず指導します。これは研究という営みの基本であり、研究成果としての論文を書く上での根拠となるものです。

ですから、論文を書くことにもこだわります。データが確定でき、それに基づいて論理的な考察が展開できた証しが論文であり、それこそが研究の価値です。データを積み重ねて材料の物性を徹底的に理解し、応用の可能性や開発の指針を与える基本原理を提案する研究が、次の革新技術の拠り所を築きます。



PROFILE

もりともゆたか

東京大学理科一類に入学、工学部材料学科で学ぶも工学部になじめず、大学院理学研究科物理学専攻に進学し、理学博士を取得。日本学術振興会特別研究員、名古屋大学大学院工学研究科助教授等を経て、2005年より現職。一貫して強相関酸化物の構造物性や物性開拓研究に取り組む。本学着任後は、物性実験家の視点からエネルギー物質科学の開拓に注力。エネルギー物質科学の深化と革新的デバイスの提案・実証を目指す。

TSUKUBA



ACHIこと阿知和真吾さんは、有名アーティストバックダンサーとして数々のツアーを巡るほか、華やかな舞台で活躍する現在のACHIが生まれ

その一歩で人生が変わる

ダンサー

ACHI (阿知和真吾) 氏

取材協力：TRINITY DANCE CENTER 渋谷校

ダンサーという職業について、どうしたらなるのか、どんなお仕事なのかを教えてください。

筑波大を卒業して東京に出てきた頃は、練習用にスタジオを借りる余裕もなく、ビルのガラスを姿見代わりに夜中まで練習しては、昼間はアルバイトをしながらオーディションを受けるという生活を送っていました。しばらくしてw-inds.というダンスボーカルユニットのツアーダンサーに選ばれて、初めてアーティストと一緒に仕事

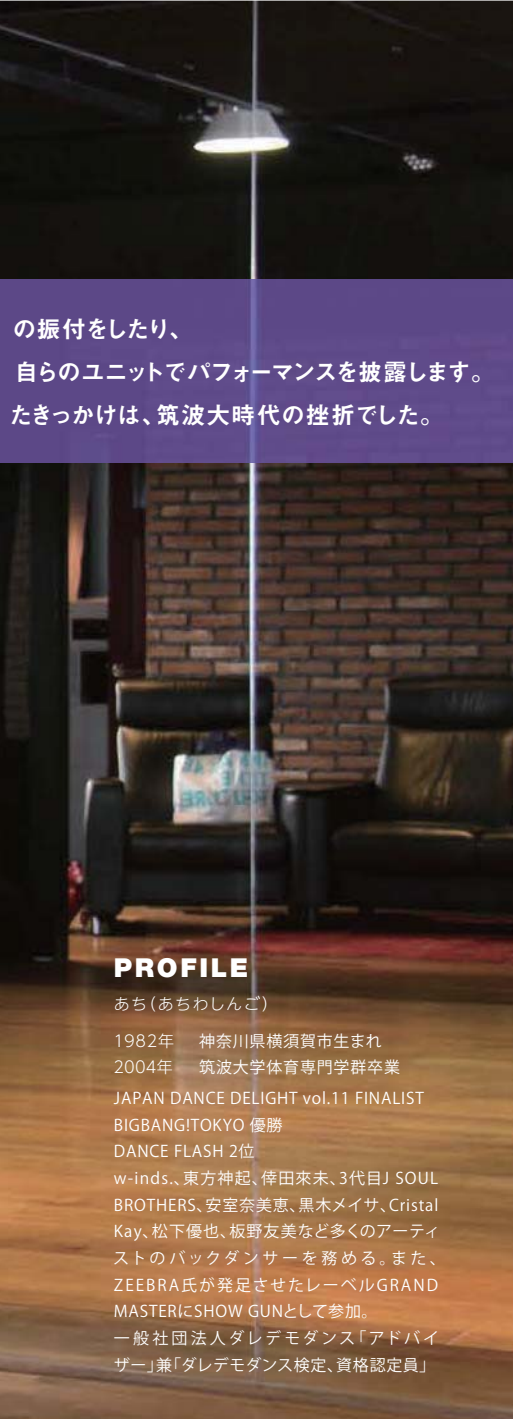
をすることになり、これをきっかけに徐々にダンスの仕事だけで生活ができるようになっていきました。

倭田来未さんや東方神起など様々なアーティストのバックダンサーを務めてきましたが、バックダンサーという仕事は、アーティストの求める世界観や楽曲の作風、振り付けのニュアンスを表現しなくてはならないので、自分のカラー以外に引き出しをたくさん持っていることが要求されます。一方、仲間とのダンスユニット、SHOW

GUN、Rockwilderでは、自分たちのやりたい世界観や表現を大切に、実験的な作品作りに挑戦しています。その他には、振り付けや演出をしたり、インストラクターとしてダンススタジオで教えるほか、イベントの企画や運営、また、モデルやデザインなど、ダンスから派生した仕事も増えています。

在学中には、大学生と専門学校生のダンスコンテスト全国大会「BIG BANG!!





の振付をしたり、
自らのユニットでパフォーマンスを披露します。
たきっかけは、筑波大時代の挫折でした。

PROFILE

あち(あちわしんご)

1982年 神奈川県横須賀市生まれ
2004年 筑波大学体育専門学群卒業

JAPAN DANCE DELIGHT vol.11 FINALIST
BIGBANG!TOKYO 優勝
DANCE FLASH 2位

w-inds.、東方神起、倅田来未、3代目 SOUL BROTHERS、安室奈美恵、黒木メイサ、Cristal Kay、松下優也、板野友美など多くのアーティストのバックダンサーを務める。また、ZEEBRA氏が発足させたレーベルGRAND MASTERにSHOW GUNとして参加。

一般社団法人ダレデモダンス「アドバイザー」兼「ダレデモダンス検定、資格認定員」

TOKYO」第1回の覇者となるなど、実力が注目されていました。この頃から、ダンサーになることを目指していたのですか？

実はずっと教員志望でした。小学生の時からサッカーをしていたので「教員になってサッカー部の顧問をする」という夢を抱いて、ならばその道のトップの筑波大学でとがんばって入学したんです。ところが、蹴球部に入学して間もなく、選手層の厚さに圧倒されて退部しました。部活から離れると友達とも疎遠になって、自分が体育専門学群にいる意味もわからなくなってしまい、大学に馴染めない時期が続きました。

そんな時に、「Realjam」というストリートダンスサークルに出会って、生活が一変しました。暇さえあればダンス、家にいてもみんなで振付

用にDVDを見たりして。社会人になるまでの期間限定の学生時代、情熱をかけて没頭した証に何かしらの結果を出そうと仲間と決めました。そして挑んだ「BIG BANG!! TOKYO」の第1回大会で優勝、翌年の日本最大のダンスコンテスト「JAPAN DANCE DELIGHT」では予選を勝ち抜き、全国大会に進出しました。この時は、出場したことだけに満足してしまっていたので、さらに次の年は全国優勝をねらって、もう一度予選に出場したんです。

ところが、結果は予選敗退。学生チャンピオンとしての自負もあったし、その頃にはイベントにゲスト出演するなど注目されていました。プロとして活躍している周りのダンサーからも「絶対に通る」って言われていたのに、前の年には出場できた全国大会すら叶わなかった。

その結果を受け止めたときに、「学生時代の思い出作りみたいな甘い気持ちがあったのかもしれない。ダンスを続ける。絶対にダンスで飯を食えるようになってやる」と、そこで初めてダンサーになることを決意しました。

教員から、ダンサーへと運命を変えた Realjamとの出会いについて詳しくお聞かせください。

蹴球部を辞めてから半年、雙峰祭の会場をぶらついていたら、たまたま目に入った松美池ステージのチラシに誘われて、軽い気持ちで会場に行きました。そこには一生懸命、しかもすごく楽しそうに踊っている学生がいたんですよ。その姿を見ていたら「やってみいな」と思って、それがRealjamとの出会いです。練習場所は学内の教室だったので、後日、体験入部することにしました。

今でも鮮明に、その日のことを覚えています。

Realjamはいろいろな学類、他大学からもメンバーが集まっていた。体を動かすことには自信はありましたが、体育専門学群の自分が他学のみならず馴染めるだろうかという不安でドキドキしながら教室までの階段を踏みしめるように登りました。新しいことを始めるときの一

歩って、何をやるにも大切なことだと思うんですけど、まさにその一歩を踏み出した日でした。

教室に入って、レッスンをつけてくれる先生にあわせて、教室の端っこで踊った途端に不安がなくなりました。「これだ！自分はこれがやりたかったんだ」と直感しました。

仕事を続けていくうえで、大切にされていることは何ですか？

ダンサーとして表現し続けるために、毎日、コンディショニングを丁寧に整えています。1日として同じ体調の日なんてないので、毎朝フラットな状態に体を戻すところからスタートして、自分の求めるダンスに近づける。その繰り返しですが日々新しい出会いや発見があって、今でも踊ることに夢中です。また、見た目や雰囲気からまだまだ誤解の多いストリートダンスの文化を社会的に認知してもらえるように、指導的な役割を期待されていると思っています。

「ダンス」って3文字の簡単な言葉ですけど、人生で大切なものを僕はずっとダンスから得てきたし、目標を失って孤独だった日々から抜け出せたのも、ダンスを通じて出会えたかけがえのない仲間と一緒にだったからです。この経験は、新たな場所、チャレンジに向かうときの支えになっています。ダンスを通じて僕に訪れた幸福や感動を色々な人と共有していきたいと思っています。

筑波大で学ぶ後輩たちにメッセージをお願いします。

ダンスを始めたたきっかけは思いつきでした。でも何かをやりたいと思ったときにすぐに始めるのって難しく、明日にしよう、来週にしよう、行けなかったからやめてしまおうって、つい思ってしまふ。見えないそのラインを越えるのは勇気のいることだけど、その一歩で自分の人生が変わることもある。その先で「違うな」って気づくだけでもいいと思うんです。一歩踏み出す勇気、それが現状を打破する鍵になると思います。



メメント・モリ、「死を想え」という意味のラテン語。「その瞬間を大切に。感じたこと、インスピレーション全てが「自分」。」ダンスはとどめておくことのできない身体表現の連続。その儚さが魅力でもあります。

附属学校 めぐり

本学には11の附属学校があり、それぞれの分野でわが国の教育をリードしています。各学校のユニークな先生や授業、行事などの活動を紹介します。

何気ない日常に視線を向け 生活者としての学びを



筑波大学附属駒場中・高等学校 家庭科・情報科

植村 徹 教諭

■ 自由な「クレープといちごソース」

整然と準備された調理室も、エプロン姿の男子が40人も集まればカオスです。落ち着いた雰囲気のなか、植村先生は食材の説明や注意事項を簡潔に、でもしっかりと伝えます。それから一斉に調理開始。各班に分かれて、材料を揃え、事前学習のプリントを確かめながら調理に入ります。特に指示がなくても、生徒たちはあまり戸惑うこともなく、どんどん作業を進めていきます。

中学で最初の調理実習は「クレープといちごソース」。包丁は使いませんが、湯せんや泡立てなどの工程もあり、意外とチャレンジングな

メニューです。へらと泡立て器と箸、卵と牛乳と小麦粉を混ぜるのに使う道具のチョイスもグループによって様々で、進捗にも少しずつ差が出てきました。

クレープを薄くきれいに焼くのはなかなか大変です。両面をきちんと焼いた円形のものから、どちらかというとスクランブルエッグに近い感じのものまで、作る人の個性が現れます。想定していた完成品は、クリームといちごソースをクレープで包んだものでしたが、各自が好きだけクリームとソースをかけて食べるフリースタイルになったグループもあり、試食会は大いに盛り上がりました。

植村先生は、冒頭のレクチャーの後は各グ

ループを回って、けがや事故のないように目を配り、できあがったクレープを写真に撮って記録します。でも調理のやり方や仕上がりを細かく指導はしません。生徒の中には、毎日のお弁当を自分で作るような「料理男子」もいれば、小学校で家庭科を経験していない帰国子女や、実技は女子任せにしていた者もいます。まずは楽しい体験をして、家庭科に対する敷居を下げるのが大切です。中学3年のテーマ学習で調理を選択するグループは、自分たちで献立を決め、先生方に振る舞えるほどの腕前に成長します。

■ 追い風と向かい風を受けて

男子校での調理実習もさることながら、男性の家庭科教員はまだまだレアな存在でしょう。植村先生自身も、中学・高校では男子と女子がそれぞれ技術科や体育科と家庭科に分かれて授業を受けた世代。男女共修は、女子差別撤廃条約への批准という社会的な追い風の中で実現しました。当時、植村先生は社会科の教員免許を持っていましたが、これから家庭科のニーズが高まると考え、大学院に入り直して家庭科の免許も取得しました。学生時代の一人暮らしで、生活技術の必要性を実感したこともきっかけでした。

中学校では1993年、高校では1994年から、家庭科は男女共修になりました。けれどもそれ以前に、男性家庭科教員への抵抗感もあったようです。1992年に大阪で「家庭科教員を





PROFILE

うえむらとほる

千葉県印西市出身。千葉県立薬園台高等学校、京都大学文学部卒業。千葉大学大学院で家庭科教員免許を取得。千葉県立関宿高等学校、流山東高等学校を経て、2006年より現職。現在は中学1年担任、「SSHメディア虎の穴」担当。高等学校「家庭基礎」(教育図書)編集協力者。マイクロソフト認定教育イノベーター。谷山浩子ファン。

めざす男の会」が発足する際に、設立メンバーとして参加しましたが、そういう会が結成されるほど、男性は家庭科の教員免許を取得する機会すら限られていたのです。その会も契機のひとつとなり全国で男性の家庭科免許取得者・採用者が徐々に増えていきました。植村先生も、最初は社会科教員として教壇に立ち、附属駒場中・高校に着任してようやく家庭科の担当になりました。学校ではすでに製図室を調理室にリフォームして家庭科授業をしていましたが、常勤教員は植村先生が初めて。当初は、



女性の先生を期待していた生徒たちがかかりされたこともありましたが、今では中・高全体の家庭科教育を一手に担う、頼もしい先生です。

■ いくつか必ず役に立つこと

調理実習はお料理教室ではありません。食材の性質や栄養バランスを理解すること、全体を効率良く進めるよう段取りを考えること、日々の生活を賢く過ごすための技術と知恵を習得する活動です。クレープ作りも、小麦粉や卵の科学的性質、生の果物からジャムができるプロセス、限られた時間内で全工程を完了させる計画、などなど学ぶべき要素は盛りだくさん。植村先生は、化学や生物など他教科の学習内容とリンクさせたり、クラウド環境を活用してコミュニケーションを図ったりと、学びの幅を広げる工夫にも取り組んでいます。

家庭科は食物・被服・消費生活・保育などの分野を含みます。実習としては、調理の他に裁縫もあります。最近、ミシンのない家庭も珍し

くなく、ちょっとした衣類なら買った方が安い場合もありますが、衣服がどんなパーツでできているか、体型や動きにフィットするための縫い方などを理解すると、試験問題を解くのととはまた違った納得感があります。一方、目下の課題は保育の授業。実際に幼児とふれあい、発達段階に応じて一緒に遊んだりおやつを作ったりする体験学習が求められています。しかしこれには近隣の保育園との連携が不可欠で、なかなか実現できないのが悩みです。

受験科目ではない分、成績をあまり気にせずに生徒と接することができるのが、家庭科の良いところです。生徒たちもリラックスして授業に臨み、回を重ねるにつれ、目に見えてスキルが向上し、手際も良くなっていきます。とはいえ生活技術はむしろ、意識しなくても毎日の生活で使うもの。社会に出て自立して、結婚や子育てを経験して初めて、その真価を発揮します。生徒たちが卒業して何年か経ち、家庭科で学んだことが役立っていると実感してくれる、植村先生はそんな日を心待ちにしています。

家庭経営に参画できる男子を

植村先生は、まだまだ全国でも珍しい男性家庭科教員の草分け的存在です。家庭科の免許をお持ちのまま、千葉県では社会科の教員でしたが、本校では家庭科で採用しました。中学校の調理実習では包丁の使い方から始まって、生徒が徐々に調理技術の習得ができるよう

に計画が練られています。これは本校の文化祭で高校3年生が調理を行い、来場者に食品を提供する場面につながっていきます。また、先生は情報教育にも精通されており、校内では教育情報関連の分掌もお願いしています。きめ細やかな先生の指導は、とかく大雑把な教員が多い男子校の中にあって貴重な存在です。これからもよろしく願います。



大野 新
副校長

躍 波 筑

今を全力で

筑波大トップチームの9番、MF。川崎生まれ。持ち味は鮮やかなドリブル、目下の課題は得点力と運動量と語る。小学生チーム手代木SCでコーチも務める。好きな選手はネイマールとメッシ。好きな授業は運動生理学、「筋肉や骨から運動の仕組みが理解できて面白い」から。

K A O R U M I T O M A

体育専門学群2年 **三 笈 薫** さん 蹴球部

2017年シーズン、昨年のインカレを制した蹴球部への注目度は高い。その中でも2年生ながら、今期の飛躍を期待されているのが三笈薫さんだ。空中でボールを捉えるバランス、柔らかなトラップ、繊細なボールタッチでディフェンダーを抜き去るドリブル、大小使い分ける精度の高い大胆なパス。サイドで三笈さんがボールを持てば、観客はワクワクしながらボールの行方を追う。

6歳からサッカーを始め、川崎フロンターレのジュニア第1期セレクションに合格した。U-18まですべての年代で同チームの育成選手として所属、当然トップチームへ昇格すると思われていた。しかし選んだのは本学への進学、なぜか？

「まだプロ選手になるには足りないものが多すぎると思いました。将来、プロ選手としてやっていくためには、筑波大で運動に関する専門的な勉強をしながら、社会性を高め、サッカー技術や運動能力を養える4年間が必要だと思いました」。

本学蹴球部の特徴に、選手のコンディションを最適化するピリオダイゼーションを重視したトレーニング、短時間で効率的な練習、選手の個性に応じて変幻する多様な戦術、が挙げられる。三笈さんは今、最先端のサッカーに触れていると実感している。加えて、部員自らが主体的に部を運営することで生まれる一体感は、学生ならではの喜びだと語る。

チームはシーズンを通じて勝ち点を取り続けることを目標に、『常勝』のスローガンを掲げる。前期リーグ途中、三笈さんの2枚のイエローカードによる退場が影響して敗戦を喫した試合がある。「僕の不用意なプレーで連勝が途絶えることになってしまって、蹴球部はもとより筑波大に関わるすべての人に申し訳ない思いでいっぱいでした。自覚と誇りを持って、昨日の自分に勝つように努力を重ねなくてはと思いました。立ち止まることなく、練習や試合で信頼を取り戻し、揺るぎないものに変えていきたいです」。

絶対的な選手になる。ぶれない決意はピッチに描かれる。



後輩にひと言
目の前のことに向上心を持って全力で取り組んでこそ、その先の高い目標につながると思います。僕自身、成長を感じているし、まだまだ伸びると信じています。

実現する行動力

イノフェスの発起人で同イベントの学生代表。好きな授業は「マーケティング工学」、好きな場所は「第3エリア」特に食堂。将来の夢は、音楽をもっと多くの人に届けるためのビジネスモデルを作ること。

Y U I T A S A W A D A

システム情報工学研究科(博士前期課程)
社会工学専攻社会工学学位プログラム2年

澤田悠太 さん イノフェス学生代表

筑波大学と都内FM局J-WAVE主催の音楽とテクノロジーの融合イベント「INNOVATION WORLD FESTA 2017(以下、イノフェス)」がつくばカピオで開催された。きゃりーぱみゅぱみゅや田原総一朗など各界著名人が多数出演し、およそ3,800人が来場した。

発起人は大学院生の澤田悠太さん。高校時代はバンド活動に夢中だったが、次に音楽ビジネスに関心を持つようになった。イノフェスの原点は、アメリカの地方都市オースティンで開催される、音楽・映像と最新テクノロジーの複合イベント「サウス・バイ・サウスウエスト(SXSW)」*だ。学類生の頃、現地を訪れ、その規模と熱気に圧倒された。

「いつか『つくば版SXSW』を実現したい」。つくばには多くの研究者や学生が暮らし、新しいテクノロジーに興味を持つ人は多い。これに、音楽の持つ親しみやすさや影響力が加われば、きっと新しい「なにか」が生まれると考えていた。

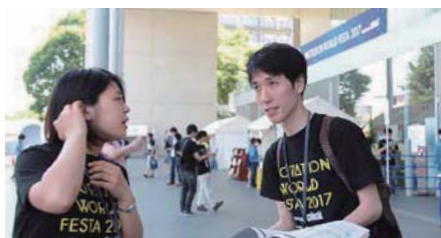
学園祭にメジャーバンドを招致する活動を通して、音楽イベントの運営に興味のある仲間を探し、学内の起業家育成講座では、構想を企画書にまとめていた。音楽ビジネスを学び、学外の人脈も広げる中で、J-WAVEの担当者との意気投合し、ついに「つくば版SXSW」は、実現に向けて動き始めた。澤田さんは、学長に直接会ってイベントの趣旨を説明し、理解を得る

ことに成功。筑波大学のイノフェス共催が決まった。

イノフェスはまだ2回。つくばのイベントとして定着させるには、企画・運営を支える学生スタッフの関わり方が鍵だ。「今年は80人余りの学生がスタッフとして参加しました。ナレーション、映像制作、演出など、いろいろな才能の持ち主がいることに驚きました。それぞれのスキルが集まって、みんなで作り上げた実感があります。ただ、継続のための仕組みや体制も整備しないと」と語る。

当日限りのお祭りではなく、ここで試したことが他のアイデアに繋がっていく、イノフェスがそんな場になることが、澤田さんの理想だ。

後輩にひとこと
筑波大のキャンパスは大学生百科事典です。いろいろな能力を持っている人が必ずいて、しかもそのレベルが高い！1人ではできないことも協力すれば実現できる場所です。



会場を歩きまわり、スタッフに指示を出す



アリーナで観客の様子と進行を確認

* SXSW: 10日間で20万人を集める、世界最大のマルチメディアの祭典。音楽や映像、エンターテインメントに関連する最新技術がトークセッション、展示、ライブなど様々な形式で発表される。



インドネシア共和国

Homeland

本学には、100を超える国から、約3千人の留学生が訪れています。このコーナーでは、本学の留学生から、出身国の自慢の場所や風景、食べ物など、多岐にわたって紹介していただきます

「就活」を通して見えた日本のふしぎ

●ものづくりに憧れて日本へ

インドネシアの首都ジャカルタから車で1時間半ほどの距離にあるバンドンという町で生まれ、バリ島で育ちました。高校卒業とともに、日本政府(文部科学省)奨学金留学生の資格を得て、東京の日本語学校に1年通い、富山高専専門学校(以下、高専)に進学しました。

私は、バリにいた頃から日本のものづくりに憧れていました。どんな働き方、考え方の元に日本がものづくり大国になったのか、それが知りたくて日本を目指しました。

高専では物質・材料分野を専攻しました。もちろん授業は日本語です。専門用語などでは苦労しましたが、そのおかげもあって大学の編入試験に合格することができたと思います。筑波大学に受験で訪れた際に、自然に囲まれていて勉強に集中できそうな環境を見て「ぜひこ

こに来たい」と思いました。他の大学にも合格していましたが、筑波大に決めました。

筑波大には留学生が多いので、外国人が特別な存在ではなく、自然に過ごせるのが心地良いです。研究室の友人や先生方が、さまざまな人種、私のようにヒジャブをしている学生に対しても、食事の制限やお祈りの時間などそれぞれの文化に対して配慮をしてくれて、優しさを感じています。

●驚きの連続。日本の「就活」

いま私は就活真っただ中です。就活は日本のものづくりをより深く知る機会になっています。これまで自動車のような機械製品の品質には注目していましたが、哺乳瓶のような身近で小さな加工製品にまで高度な技術が施されていることを知って、改めて感心しました。

留学生向けの就職セミナーや合同説明会なども開催され、外国人の採用に積極的な企業も多いことがわかりました。日本で就職して、いつか日本とインドネシアの橋渡し役として母国に貢献することが私の夢です。

日本の就活のシステムは複雑です。例えば一度に複数の会社にエントリーするところ、それぞれの選考スケジュールにあわせて、会社ごとに違う方法の選抜に対応しなくてはいけないところなどです。みんなはどうやって管理しているのかとふしぎになります。エントリーシートが郵送だったりWEBだったり、テストが個別だったりテストセンターに行かなくてはならなかったり。日本人学生には30~50社受験する人もいます。聞いています。どうしたらそんなことができるの？

服装や書類の送り方など細かいことは学内のマナー講座を活用したり、友達に教わったりしています。



物性・分子工学専攻の研究室仲間と



就活スタイル



©JOIR.

Alanna Faradhiyani

アランナ・ファラディヤニさん

所属 | 数理物質科学研究科(博士前期課程)
物性・分子工学専攻2年

課外活動 | 在日インドネシア留学生協会茨城支部



インドネシアの就職活動は日本とは全く違います。とにかく卒業証明書がなければ始まらないので、大学を卒業して初めて就職活動のスタートラインに立てます。卒業後に長期休暇を取る人もいれば、すぐに仕事を探す人もいます。企業も一斉採用ではなく必要なポジションを随時募集するので、職に就こうと思ったら、新聞で求人を探したり、希望する業種、企業のホームページをチェックしたりします。日本のような求人情報誌のようなものはありません。また、募集人数も多くないので競争も激しいですね。

● おおらかでフレンドリーなインドネシア人

インドネシアでは貧富の差が大きく、経済状況によって就ける職業が限られています。そのせいもあって職業によってはプライドをもって働くことが難しいため、質の低い労働になってしま

うことが問題になっています。一方で、どんな職場でも上司と部下ではキャリアの差があるのは当然としても、コミュニケーションで上下関係はありません。日本では上司と部下の隔たりが大きく、話づらい雰囲気があるのに、なぜ「飲み会」の後でそれが縮まるのでしょうか？ 私はお酒を飲まないのに、余計にわからないのかも。

日本のテレビで「バリ島の人とはどんなはずらされても怒らない」というバラエティ番組を見たことがあります。確かにインドネシア人はおおらかで親しみやすいと思います。日本に来てから改めて知ることができたインドネシアの良さでした。外国人に対してもどんどん声をかけますし、旅行者から話しかけられたらもう止まらないと思います。インドネシアを観光したら、ぜひ地元の人と交流してみてください。

私は在日インドネシア留学生協会茨城支部に所属していて、県内在住およそ200人の会

員が、地域に溶け込めるようお手伝いをしています。今年の11月には「インドネシア友好のゆうべ」と題して、インドネシアと日本、両国の大学生が音楽や踊りで交流するイベントを開催します。

インドネシアにはおよそ1万7000もの島があって、約1200の言語があります。それぞれの地域に独特の踊り、言語、衣装、建築様式があります。共通語はインドネシア語ですが、西ジャワ島のバンドン出身の私には東ジャワ島の言語はわかりません。踊りについては、かつて儀式や祈りで捧げられたものや、歴史を伝える手段だったものが、今では日常の娯楽や文化として残っています。料理にも地域ごとに名物があります。

インドネシアを訪れるときには、色々な地方を巡ると面白いと思います。



今年5月のつくばフェスティバルでは、在日インドネシア留学生協会茨城支部の仲間と、民族衣装を身につけて西スマトラのパダン地方の踊り「ピーリンダンス」を演舞



牛肉をココナツミルクとスパイスで、水分が抜けるまで長時間も煮込んだ「レンダン」は、西スマトラのパダン地方の郷土料理。アメリカCNNの企画「世界のおいしい料理ベスト50」で、第1位に選ばれたことも

写真提供：インドネシア共和国観光省



©JOIR.

前回の「インドネシア友好のゆうべ」ではインドネシア各地の踊りが披露された

TSUKU COMM TOPICS

式典

入学おめでとう！ ともにIMAGINE THE FUTURE.

桜の花が一気に満開を迎えた4月7日、つくば国際会議場において、平成29年度学群・理療科教員養成施設の入学式並びに大学院入学式が行われました。学群生2,217人、編入学生118人及び理療科教員養成施設入学生20人、大学院生2,511人が本学で新たな一歩を踏み出しました。

永田恭介学長は新入生に向けた祝辞で「過去の単純な延長線上に未来を描けない時代に大学で何を成すべきか、また大学で学ぶ皆さんは何を成すべきかということについて、深く考え行動しなければなりません」などと期待を述べました。



祝辞を述べる永田恭介学長



絶賛配布中

「re+ 学生生活で悩んだときに読む本@筑波大学」

本学内で無料配布されている小冊子「re+ (レタス) 学生生活で悩んだときに読む本@筑波大学」は、メンタルヘルスに関する学生の悩みに対して、学内の相談機関や近隣の病院、休学や復学の手続きなど、具体的な情報を提供するハンドブックです。これは「つくばアクションプロ

ジェクト(T-ACT)」※を活用した学生の自主制作によって完成しました。

「re+」発案者の高橋あすみさんは、5年前の人間学群1年次に、メンタルヘルスに関する活動を行う団体「希死回生」を立ち上げました。メンバーとともに、身近な学生のメンタルヘルスに無

関心になりたくない、という強い思いのもと自殺予防の啓発活動を続けてきました。そんな活動の集大成が「re+」の発行です。昨年度下半期のT-ACT活動報告会では優秀賞に選ばれ、1,000部発行したハンドブックも残りわずかとなっています。

高橋さんは「最初は『大学生のメンタルヘルスのために何かしたい』という、私個人の関心だったのが、共有できる仲間に出会い、一緒に活動することができました。現在は「re+」をツイッターで公開する準備をしています。全国の学生の目に留まり、各大学で活動の輪が広がっていくことを期待しています」と企画を振り返りました。

高橋あすみさん

心理学修士を取得したのち、疾患制御医学専攻(一貫制博士課程)にて、現在は精神医学を専門に学ぶ。「re+」は本学T-ACT推進室と中央図書館で配布中。また、ツイッター(@kishikaisei_tkb)でも公開予定



※学生の自主的な活動を支援する取り組み。教職員や外部の専門家が、企画の実現を目指す学生をサポートします

留学生と一緒に暮らす

シェアハウス型学生宿舎「グローバルヴィレッジ」がオープン

本学筑波キャンパス内に留学生と日本人学生のシェアハウス型の学生宿舎「グローバルヴィレッジ」がオープンし、4月5日に新入生と留学生合わせて259人が入居しました。グローバルヴィレッジは本学が目指す国際性の日常化を実現するために計画、整備された宿舎です。1ユニットは、共用の玄関、リビングダイニング、シャワールーム、トイレと各個室で構成され、5人でシェアします。

敷地内には別館の交流棟「コミュニティステーション」があります。スタディールーム、ラウンジ、和室やコミュニティキッチンを用意、さまざまな国際交流イベントなどで利用することができます。



グローバルヴィレッジ 手前がコミュニティステーション、奥が居住棟

グローバルスポーツイノベーション棟 体育・スポーツ分野の国際連携拠点始動

今年1月に「グローバルスポーツイノベーション棟 (GSI棟)」が完成しました。

GSI棟は、国内外の大学・関連組織・企業との大型プロジェクト(連携事業)を円滑、かつ効果的に推進し、我が国随一の体育・スポーツ分野の国際連携拠点となることを目的として新設されました。運動生理、バイオメカニクス、脳機能解析など運動時のパフォーマンスを測定する最新

の装置が導入され、国内外の企業や研究機関との共同研究のほか、通常の授業でも、学生が最先端の設備を使って学んでいます。

また同棟では、大学院人間総合科学研究科体育学専攻の英語によるプログラムとして「スポーツ・オリンピック学学位プログラム」を実施し、国際スポーツ界のリーダーを目指す学生を世界各国から受け入れています。



年齢、国籍、キャリアの異なる学生がともに英語で学ぶ



モーションキャプチャーを付けた学生がフォースプレートと呼ばれる測定板の上でジャンプすると、リアルタイムで3次元データが表示、分析レポートが生成される



保健体育科(体力づくり運動)指導法の授業の様子

受賞・表彰

平成29年度 文部科学大臣表彰科学技術賞受賞

人文社会系の土井裕人助教が、「イノベーションを共創する市民参加型研究の普及啓発」の功績を認められ、平成29年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞(理解増進部門)を、国立研究開発法人産業技術総合研究所の江渡浩一郎主任研究員と共同で受賞しました。土井助教は、江渡氏が立ち上げた、プロの研究者と“野生”の研究者が自分の研究成果を共に発表・共有できる場としての「ニコニコ学会β」の活動に(期間半ばから)参加し、その発展に寄与した功績が認められたものです。ニコニコ学会βは5年間の活動期間中、9回のシンポジウムを開催し、延べ数百人が登

壇して行ったプレゼンテーションを、ネット中継を通じて多くの人が共有しました。

そのほか今年度の同賞では、若手科学者賞として、数理物質系の伊藤良一准教授(「グラフェンの多孔質化による高効率エネルギー利用

達成の研究」)、国際統合睡眠医科学研究機構の林悠准教授(「レム睡眠の意義とメカニズムに関する研究」)、数理物質系の都甲薫助教(「絶縁基板上IV族半導体薄膜の結晶成長とデバイス応用の研究」)が受賞しました。



授賞式会場にて。土井裕人 助教(左)と江渡浩一郎氏

世界で初めて長期埋め込み可能な人工硝子体を開発

ピンポン球よりも小さいヒトの眼球には、複雑な構造と機能が詰まっています。レンズ(水晶体)が集めた光はいちばん奥にある網膜で像を結び、その光信号は視神経に送られます。網膜を眼球の内側に押さえているのが、眼球内を満たしている硝子体(しょうたい)というゲル状の物質です。外からの衝撃や老化、炎症などによって状態が変化すると、網膜にさまざまな病気を引き起こします。そのため、硝子体を取り除く硝子体手術が数多く行われています。

医学医療系の岡本史樹講師は、眼科の専門医として、年間数百件の硝子体手術をこなしています。除去された硝子体は再生しません

が、やがて代わりの液体で満たされます。しかし除去した直後は、網膜を眼球の内側にしっかり押さえておくために、シリコンオイルやガスといった補完材料を注入します。ところがこれらは生体適合性が低い上に、注入したオイルやガスが偏らないよう、術後数日間はずつ伏せ姿勢で安静を保つ必要があります。生体適合性に優れた人工硝子体の開発が長年の課題でした。

岡本講師は同僚の星崇仁(すうじん)講師と共に、ゲルの専門家である東京大学の酒井崇匡(たかまさ)准教授と共同研究を行い、新たな分子設計により、生体内に直接注入可能な、含水率の極めて高い高分子ゲル材料を作製し、

人工硝子体として有用であることを、ウサギを用いた動物実験で確認しました。今後、網膜疾患を含む眼科系疾患の治療に役立つことが期待されます。



岡本史樹 講師

微生物の酵素を模倣した新しい触媒系で人工光合成に成功

数理工物質系の小島隆彦教授と大学院生の塚越悠人さん(数理工物質科学研究科博士前期課程化学専攻2年)らは、第一遷移金属であるニッケルと硫黄を含む物質からなる錯体を触媒として用いた、二酸化炭素の新しい光還元系を開発し、プロトンの還元による水素発生をほとんど伴わず、選択的に二酸化炭素(CO₂)を一酸化炭素(CO)に還元することを実現しました。

自然界の緑色植物における光合成では、太陽光を利用して、水と二酸化炭素から、最終的にグルコースなどの有機物を生産することで、太陽光エネルギーを化学エネルギーへと変換し貯蔵しています。光エネルギーを化学エネルギーへと変換する「人工光合成システム」の技術を確立できれば、化石燃料に過度に依存しないク

リーンで持続可能な社会の実現に向けて大きな一歩が踏み出せます。しかしそのためには、極めて安定な化合物であるCO₂を活性化し、有用な化合物へと変換する、高性能なCO₂還元触媒の開発が不可欠です。高価な貴金属の金属錯体では、このような触媒活性を示すものが知られていますが、安価なニッケルや鉄などを用

いた金属錯体触媒には、CO₂を還元するよりも先に水を還元し、水素を発生させてしまうという難題がありました。

同研究チームは、自然界に存在する酵素の活性中心をモデル化したニッケル錯体を触媒に用いることで、高効率かつ高選択的にCO₂からCOへ光触媒的に変換することに成功しました。



小島隆彦 教授(左)と塚越悠人さん

筑波大学科学技術週間 キッズ・ユニバーシティ

4月22日、毎年恒例の科学技術週間のイベント「筑波大学 キッズ・ユニバーシティ」が実施されました。「一日筑波大生になって科学の面白さや大学の魅力を体験してもらう」ことを目的とした、特別授業、体験教室、工作教室、観察ツアー等、盛りだくさんのイベントです。この名称で実施されて今年で6回目になります。

当日は天候に恵まれ、数多くの子どもたちや保護者などが訪れました。

2012年から毎年配布している「学生証」(有効期限は筑波大学に入学するまで)は今年も好評で、300名以上のキッズが受け取りました(保護者を含めた参加者数はおよそ400名)。



オリンピックのメダリスト、平岡さん(左奥)に質問

特別授業

キッズ・ユニバーシティの大きな目玉は、階段教室で大学教員が行う特別授業です。今年は、体育系の渡部厚一准教授による「本物のチャンピオンになってほしい」と、数理物質系の新田冬夢助教による「南極の望遠鏡で宇宙を探る」を実施しました。

● 本物のチャンピオンになってほしい

渡部准教授の専門は、アンチドーピングを中心としたスポーツ医学。先生自身、かつては水泳の選手で、医師となってからは高所トレーニングやドーピング防止に関わる研究をしています。

オリンピックのメダリストや有名なプロスポーツ選手が、禁止薬物などの服用によるドーピング違反を理由にメダルを取り上げられたり、大会への参加資格を失うというニュースをよく聞きます。何が、どうしていけないのでしょうか。当日は、ロンドンオリンピック柔道(60kg級)の銀メダリスト、平岡拓晃さん(人間総合科学研究科3年)も交えたトークが盛り上がりました。日本大学豊山女子高等学校理数Sクラスからは十数人の生徒が参加し、「遺伝子ドーピング」についてなど、事前学習に基づいた鋭い質問も飛び出しました。

● 南極の望遠鏡で宇宙を探る

新田助教は、電波望遠鏡の研究をしています。南極と宇宙、どこで結びつくのでしょうか。地球上でいちばん乾燥している場所が南極の高地です。そこだと水蒸気の影響を受けずに、宇宙か

らのいろいろな電波が観察できるので、銀河が生まれた謎を地球から探るのにいちばん適した場所が南極なのだという話に、みなさん納得しました。南極望遠鏡建設の夢が早く実現するといいですね。



銀河誕生の謎を探る南極望遠鏡の話

体験教室

キッズ・ユニバーシティならではのプログラムや、電子顕微鏡室公開、遺伝子組み換え施設見学会、スーパーコンピュータ見学、プラズマ研究センター公開など、多彩な催しが行われました。

● 筑波大学きみどり散歩<虫の観察会>

もう一つの人気プログラムの虫の観察会には、午前と午後2回の開催で延べ60人が参加しました。隊長は、生命環境系の澤村京一准教授。澤村研究室の学生隊員に率いられ、今年もキャンパス内の昆虫やカナヘビなどの採集観察をしました。



澤村隊長が率いる虫の観察会

● 3Dナノワールド

総合研究棟B 1階ロビーには、空気圧で膨らませたシアタードームが出現し、「3Dナノワールド」の世界を映像で体感しました。これは、ナノの世界の「人工的な生き物」のシミュレーションを立体映像で投影するという企画でした。

サイエンスショー

筑波大生のサイエンスコミュニケーショングループSCOUTが企画する「科学あそびラボ」の今年の工作は、プラスチックカップと風船を使った空気砲づくりでした。サイエンスショーで

● 筑波大学地底探検ツアー

昨年から始まった地底探検ツアーは1回につき20人、2回分の事前登録はすぐに埋まりました。春日エリアを除くすべての建物を地下でつなぐ全長約14kmの巨大な共同溝のほんの一部を、ヘルメットをかぶって巡るツアーです。トンネル内には、電線、水道管、ガス管、空調用の管などが通っており、普段は担当者以外の大学関係者も足を踏み入れることのない、地下の巨大空間を探検しました。縁の下の力持ちという言葉をも、みなさん実感したことでしょう。



巨大な地下空間を探検した筑波大学地底探検ツアー

● タッチプールで海の生き物にさわって、生き物を学ぼう!

今年も下田臨海実験センターから海の生き物がやってきました。特設プールに小型のドチザメ、イセエビ、ヒトデ、ヤドカリなどがいて、自由に触ることができます。教室には顕微鏡も持ち込まれていて、砂の中にすむ生物を観察しました。



下田の海で採れた生きものを観察

● 石造文化財の復元修復法に挑戦!

今年初めて開催されたこの企画では、欠けたり割れたりした石造文化財を、簡単な道具を使って復元・修復する体験をしました。

スタンプラリー

毎年大人気のスタンプラリー。今年も各イベントコーナーにスタンプを配置し、全部で5個のスタンプを集めたキッズ筑波大生は、くじ引きで景品と引き換えます。締め切り時間の午後4時直前に駆け込んでくるキッズも多くいました。参加したキッズのほぼ全員が5個のスタンプを集めて、景品を手に入れました。



空気を見るための新兵器が登場した科学あそびラボ

キッズ・ユニバーシティ

来年は4月21日(土)の開催を予定しています。

Go Abroad! <2017春季留学フェア>を開催



5月17日、本学中央図書館前の広場で、留学に興味のある学生向けのイベントGo Abroad! <2017春季留学フェア>を開催しました。会場では国や地域ごとに華やかなブースを設け、留学についての情報提供や、教員・留学経験者による個別留学相談を行いました。フェアには300人以上の学生が来場し、情報収集や異文化交流を行いました。さまざまな国籍の学生が楽しそうに交流する様子は、留学生が多く在籍している本学ならではの光景です。



受賞・表彰

ジュニア世界オリエンテーリング選手権大会2017に 本学女子3名が代表選出

フィンランドのタンペレで7月9日から16日に開催される、20歳以下(1997年1月1日以降生まれ)を対象としたオリエンテーリングの世界大会「ジュニア世界オリエンテーリング選手権大会2017」に、本学オリエンテーリング部から、増澤すずさん(比較文化学類2年)、小竹佳穂さん(生物資源学類2年)、宮本和奏さん(地球学類1年)が出場します。女子代表選手6人のうち、3人が本学からの選出です。

オリエンテーリングは、地図を読んで森や市街地を走り、与えられたチェックポイントをいかに早く巡るかを競うスポーツです。今回の会場となるフィンランドでは、プロ・アマともに人気の高いスポーツで、たくさんの観客がゴール地点に集まって選手にエールを送ります。

2年ぶり3度目の出場となる宮本さんは、大会を前に「地図や植生などいろいろな情報から最

適だと思うルートを決めて、自分自身をナビゲーションしながら走ります。それがうまくいくと本当にう

れしいです。経験を積んだ分、前回より上を目指して頑張ります」と抱負を語りました。



左から、小竹佳穂さん、宮本和奏さん、増澤すずさん

第37回筑波大学オリエンテーリング大会

3人が所属するオリエンテーリング部は、10月15日に那珂市で第37回筑波大学オリエンテーリング大会を開催します。昨年はおよそ400人が参加しました。今年は、前日の14日に、ファミリーでも参加できる「つくばロゲイニング」も実施します。



世界のトビラ

筑波大学は、海外の教育研究機関と連携し、学生・教職員の受け入れや派遣、交流イベントの開催など、国際的にも「開かれた大学」を目指して、さまざまな活動を展開しています。

つくばから世界へ、つくばへ世界を

海外にも数多くの研究教育拠点を有し、連携協力を推進しているのが、筑波大学の大きな特徴のひとつです。その強みを生かして、つくばから世界に向けて発信したり、つくばに居ながらにして世界を体感するための様々な機会を設けています。

Tsukuba Global Science Week (TGSW) 2017

TGSWは、国際社会や地域社会が抱える様々な課題を解決するために、世界中の研究者が集まり、多岐にわたる学術分野の最先端の知を共有し、解決策を発信する場です。専門的な議論だけでなく、異分野交流や連携ネットワークの構築も目指しており、関心のある方々に広く開かれています。8回目となる今回は「Science for Social Innovations」をメインテーマに掲げ、医学、生命科学、化学、教育、情報科学、人文社会科学、スポーツ科学、芸術学などの幅広い領域、さらには分野融合型のセッションを多数開催します。

日時：2017年9月25日(月)～27日(水)

会場：つくば国際会議場

参加費：無料

TGSW2017ホームページ(参加登録)：

<http://www.kokuren.tsukuba.ac.jp/TGSW2017/>



ブラジルウィーク

毎年、世界各国の協定校とその国にスポットをあてた海外文化ウィークを開催しています。今年は、「ブラジルウィーク」として、本学と協定を結んでいるサンパウロ大学の紹介の他、サンバショー、ブラジルコーヒー試飲会、ブラジルフード試食会、日系移民の歴史解説、学生によるブラジル関連企画など、盛りだくさんのイベントが行われます。ぜひお立ち寄りください。

日時：2017年9月22日(金)～25日(月)

会場：筑波大学サテライトオフィス、
つくば駅周辺

参加費：無料

ブラジルウィークイベント案内：

<http://www.tsukuba.ac.jp/event/e201707051715.html>



ツクバで ツナがる

5000人を超す教職員がいる本学。



筆者左端

BATON 01

総務部人事課
今 千恵子 さん

生き生きと充実した毎日

将来どんなところで働きたいかという質問に「学校」と答えていた私。微力ながら大学事務として筑波大学に勤務し、月日の流れはあっという間で昨年永年勤続表彰をいただいた。筑波大学は広大なキャンパスで緑が多く四季折々色々な表情をみせてくれる。穏やかな風と一緒に学生の楽しそうな笑い声が聞こえる。そんなキャンパスで充実した毎日を過ごしていることをうれしく思う。自分も成長し続けたいと思う。写真は家族で北海道旅行した際のこと。乗馬初体験だったがたまたま楽しかった。いつまでも新たなことにチャレンジしていきたい。

NE
XT

今回は、財務部全学会計センターの飯野玲子さんです。「以前2度同じ職場となり、公私にわたり仲良くさせてもらっています。とてもチャームングで素敵な女性です」

つくばには素敵なカフェが多い。越してきてしばらくは、「古民家再生」「自家栽培」「隠れ家」…とキャッチーなフレーズに惹かれ、休日にはカフェ巡りを楽しんでた。2人の出産を経て、気づけばそんな楽しみとは疎遠の日々だったが、最近、娘たちを連れて気になるカフェに足を運んでみた。すると、意外と「女子トーク」も成立するし、生意気にもトイレを批評したりして結構面白い。気づかないうちに大きくなったものだ。これからは一緒に開拓できるかも!?接客に感動した「ショコラブラン」、娘たちが気に入った「cox」。おススメです。

施設部施設マネジメント課
津谷 菜保子 さん



娘たちとカフェめぐり

BATON 02

NE
XT

今回は、図書館情報エリア支援室の村上沙代さんです。「同じ日、隣の席で筑波大学デビューした仲間。いつも明るく前向き!周りを元気にしてくれる素敵な女性です」

医学医療系教授
加藤 光保 さん

(元)先輩教授と久々に一緒に旅行する機会があった。夜、ホテルの部屋で飲みながら、「筑波大学はどういう学生を育てれば良いんだと思う?」と尋ねられた。「世界の至るところで、日の丸を背負って皆のために頑張る人」と答えた。どんな仕事でも、地球の裏側の片田舎で働いていても、オリンピック選手を応援するような純粋さで皆が応援したいと思える、ひたむきに仕事に取り組む卒業生を誇りに思うことが、筑波大学が目指す姿だと思う。「そう思っているなら良かった。」という返事だった。この先輩は15年前からいつもこうだった。

NE
XT

今回は、「ベトナムで活躍する研究室の卒業生との記念写真に知らないうちに入っていた悪戯好きな先輩です」

どこでもひたむきに



筆者左端

BATON 05

どうしても自分の研究分野(博物館学)を拡張していくために、ついに60歳になったのを契機に決意!大学時代に第二外国語として学んだのですが、四声の発音ができずに断念。10代で英語、20代でスペイン語、30代でフランス語とラテン語を学びましたが、中国語は遠ざかっていました。フランス語の翻訳も2冊、英語も3冊翻訳本を出しているの、もういいか…と思いましたが、やはりここは一番勝負。中国語の論文もきちんと読まなければダメだと思い、奮起して再出発!最近では中国留学生とも簡単な会話ができるようになりました。

NE
XT

今回は、図書館情報メディア系助教の小泉公乃さんです。「私がピッツバーグ大学を訪問したとき、小泉先生はピッツバーグ大学で研究員をしていました。その後、小泉先生は縁あって筑波大学に着任し、本系のホープとして活躍していただいております」

中国語の学習、再出発



BATON 06

図書館情報メディア系教授
水嶋 英治 さん

リレーメッセージ

それぞれが切り取るツクバの「今」を、8本のバトンでつなげていきます。

BATON 03

病院総務部患者サービス課
浅見 暁子 さん

管理栄養士にとって栄養指導は患者さんとの関係を築く上で大切な仕事です。しかし、「栄養指導＝食事制限」というイメージが強い方が多いのではないのでしょうか。当院の栄養士は「食べることが好きなメンバーが勢揃い。食べ物の話題は尽きませんが、しっかり身体も動かして、体調管理しています。患者さんへは病気と向き合いながらも、前向きに食事療法に取り組んでいただけのような指導を心掛けています。食は空腹を満たすためではなく、楽しみを得て、健康な身体を作る大切な行為であることを忘れないようにしたいです。

食事療法は楽しく



食教育を取り入れた小児バイキング食

NE
XT

今回は、附属病院陽子線治療センターの吉村洋祐さんです。「私の尊敬している先輩のご主人です。明るく温厚な方で、仲良くさせていただいています」

グローバル・commons機構
山田 尚子 さん

筑波大学は国際交流に力を入れており、キャンパスでは様々な国から来た学生や職員を見かけます。キャンパス内に限らず、町を歩いていても多くの外国人を見かけます。現在私は3人の子供(小学生2人、3歳児)の子育て中ですが、子供たちのクラスにも必ず外国から来た生徒、園児たちがおり、大学の国際化は学内だけでなく、地域の住民にも外国を身近に感じさせてくれています。

国際化を感じるまち



BATON 04

NE
XT

今回は、システム情報系教授の秋山英三さんです。「子供を通じて出会い、10年来のお付き合いです。当時の肩まである髪型、今の少し短めの髪型、どちらも似合うカッコいい先生です」

部活のような職場バンド

「9月16、17日
MUSIC PLANT土浦店」で
発表します！他の職員バンド
も多数出演するので、ぜひ
お越し下さい」



広報室

松村 武大 さん

昨年末頃から職員同士でバンドを組み、9月の発表に向けて練習をしています。僕はドラム担当で、他にボーカル(兼キーボード)、ギター、ベースの計4人の職員バンドです。ドラムってやってみるとかなり難しく、ただの太鼓とシンバルだから大丈夫だろうと思っていたあの頃が懐かしい…(白目)。チームで一つの目標に向けて一緒に頑張る、という、なんだか高校の時の部活を思い出します。まさか、今になって職場の人と「部活」をすることになるとは思いませんでしたが(笑)。引き続き、チームプレーで頑張っていきたいと思います！

NE
XT

今回は、総務部人事課の新垣早紀さんです。「バンドでベース担当の先輩です。本人には言っていないが、素敵な笑顔にいつも勝手に癒されています(笑)」

BATON 07

私は2003年まで大学、大学院にて学び、その後仕事を得たため、つくばを離れ、2014年に教員として再び戻ってきました。たかが10年、されど10年。なんと一つの街ができていないではないですか。以前は、北大通りの先は行き止まりになっていたのに…。また、私の学生時分は、一人一台(車)が当たり前であったのに、いまや車いらずの生活に。つくばの街、学生を取り巻く環境は大きく様変わりしていますが、学生の雰囲気は変わりませんね。これからのつくば、筑波大学の変化に少しおびえながらも、さらなる進化に期待しています。

進化するつくば

NE
XT

今回は、システム情報エリア支援室の古谷明久さんです。「毎週月曜に集まって一緒に汗を流すサッカー大好き仲間です」



体育系助教

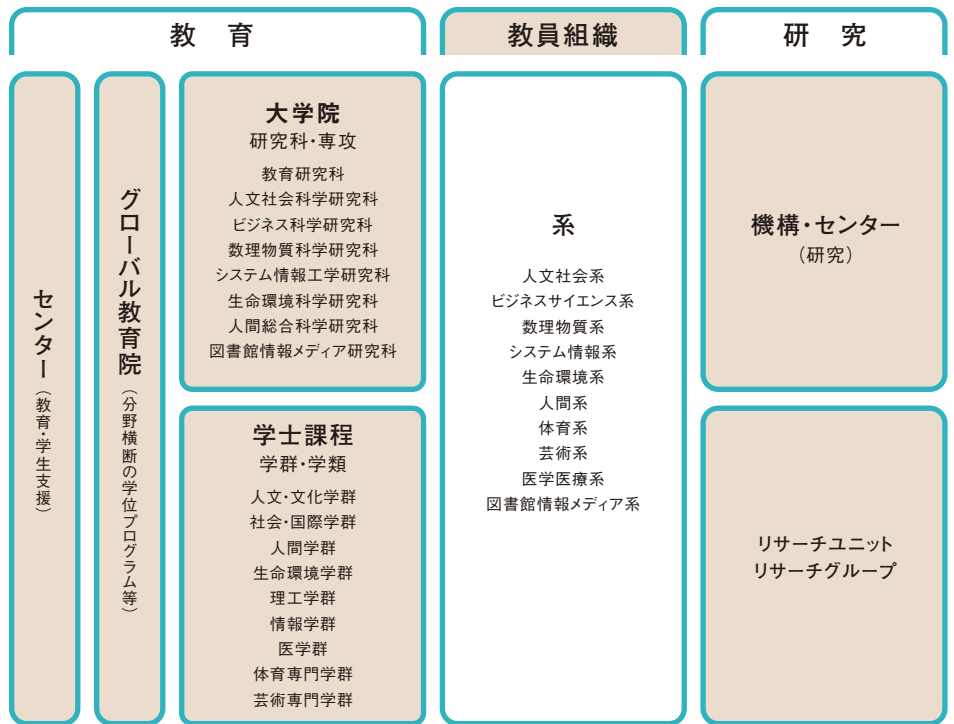
小井土 正亮 さん

BATON 08

学際融合・ 領域横断的な 教育研究システム

筑波大学は医学・体育・芸術も有する総合大学として、学群・学類等の壁を低くして、学生が専門分野以外にも幅広い教養を身につけることを可能にしています。

また、教員は「系」に所属し、基盤的な研究を行いつつ、学群・学類、研究科・専攻、センター等それぞれの目的に即した教育研究を担います。



2017.7.1現在

筑波大学サテライトオフィスとは？

より幅広く本学を知っていただくために、つくば駅に隣接する複合商業施設「BiViつくば」2階に設置された情報発信拠点です。本学の学生がスタッフとして活動しており、入学案内等の配布の他、教職員や学生によるさまざまなイベントを通じて、社会、地域との交流を行っています。



本の貸し出しが始まりました

展示中の絵本や、本学の研究成果に関連する書籍の貸し出しを行っています。図書館情報メディア系 宇陀・松村研究室の協力により、さまざまな分野の最新科学に関する解説書から昔懐かしい絵本まで、眺めるだけでも楽しいディスプレイが施されています。その場で気軽に手に取ることはもちろん、借りてじっくり読むこともできるようになりましたので、ぜひご利用ください。図書館や書店とは一味違う、本との素敵な出会いがきっとありますよ。



「プチマルシェ」が好評です

つくば機能植物イノベーション研究センター(旧農林技術センター)で栽培した農産物の直売会「プチマルシェ」が好評を博しています。昨年10月から、毎月第4水曜日のお昼に開店しています。回を重ねるにつれて利用者も増え、行列ができることもあるほどです。新鮮な野菜や多肉植物の鉢植えなど、品揃えは季節や収穫状況に応じて変わります。完売になり次第、終了ですのお早目にどうぞ。(詳しい実施日時などはお問い合わせください。)



お問い合わせ
☎ 029-855-2101
✉ bivi-koho@un.tsukuba.ac.jp



筑波大学サテライトオフィスは皆さまのご利用をお待ちしております。
また、Twitterでもイベント情報などをお伝えしています。
@tsukuba_sat

Events Calendar

7
July

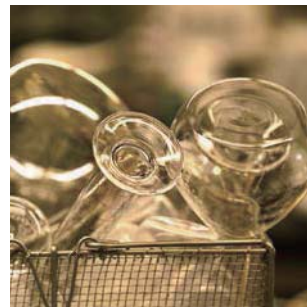
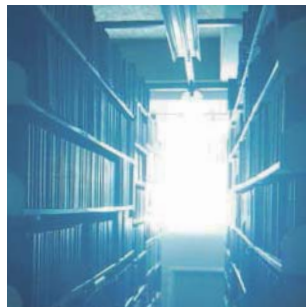
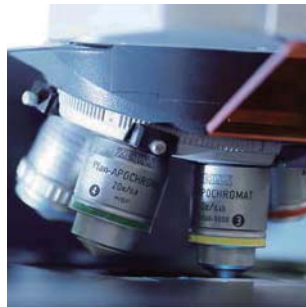
- 24日(月)・TIA SUMMER LECTURE IN 2017(～8/3)
 - 25日(火)・藻類バイオマス・エネルギーシステム開発研究センター(ABES)サマープログラム(～29日)
 - 29日(土)・夏休み自由研究お助け隊2017
 - ・藻類バイオマス・エネルギーシステム開発研究センター(ABES)一般公開
-

8
August

- 2日(水)・春ABCモジュール期末試験(～8日)
 - ・夏季リケジョサイエンス合宿(～4日)
 - 5日(土)・オープンキャンパス(～7日、11日)
 - 8日(火)・春学期授業終了
 - 9日(水)・期末試験予備日
 - 10日(木)・夏季休業(～9/30)
 - 18日(金)・化学グランプリ2017(～19日)
 - 28日(月)・TIA先端計測・分析サマースクール(～30日)
 - 29日(火)・TIAナノグリーン・サマースクール(～31日)
 - ・TIAナノエレクトロニクス・ナノテクノロジーサマースクール(～9/1)
-

9
September

- 22日(金)・ブラジルウィーク(～25日)[筑波大学サテライトオフィス他]
- 25日(月)・卒業式
 - ・大学院学位記授与式
 - ・Tsukuba Global Science Week(TGSW) 2017(～27日)[つくば国際会議場]
- 29日(金)・秋学期入学式



TSUKU COMM 【ツクコム】(筑波大学広報誌) vol.36
平成29年7月発行 編集・発行:筑波大学広報室
〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1 電話:029-853-2063
E-mail:kohositu@un.tsukuba.ac.jp URL:www.tsukuba.ac.jp
©2017筑波大学(本誌記事の無断転載を禁じます)